



## 自然界と人は パートナー

### 心 あ つ た か ニ ュ ー ス

前号で、NHK放送の海の異変より、海の酸性化が進んでいること、この酸性化には、地球のフィードバックと呼ばれる、自然界の小さな生物が食い止める力を持っているという内容をお伝えしました。

その一つは、マングローブです。同番組でも、マングローブへの取り組みがありました。マングローブは、熱帯雨林など陸上に生える樹木よりも、二酸化炭素の吸収能力が高い。その理由は、丈夫な葉っぱだ。大気中から二酸化炭素を吸収し、やがて水の中に葉が落ちる。丈夫な葉は、水の中で分解されるのに長い時間がかかる。葉に取り込まれた炭素は、泥の中に数百年にわたって封じ込められる。この働きによって、マングローブは、40倍の面積の熱帯雨林に相当する二酸化炭素の吸収量を誇る。国連はいま、海藻や海辺の植物が生み出す「生物ポンプ」の力に注目している。世界の沿岸や浅瀬で植物を育てることで、年間最大14億トン、日本が1年間に排出するのと同様

量の二酸化炭素を削減することができる」と試算している。そして現在は、この生物ポンプ作用ができる植物を本来海藻などが育たない沖合の海で実験し、生物ポンプの力を高める挑戦が始まっているそうです。そして、日本では、生物ポンプの一つであるアマモを増やす取り組みを行っている岡山学芸館高校3年の入澤佳苗さんを紹介していました。アマモは、半年のうちに1メートルも成長。その過程で、大量の二酸化炭素を吸収し、炭素として体の中に蓄える。アマモが群生する海底の泥を分析すると、大量の炭素が含まれていることが分かった。枯れたアマモが泥となつて蓄積し、海底に炭素を封じ込めているのだ。まさにアマモ自身が、「生物ポンプ」の役割を果たしている。このアマモを、生息に適した日本全体の沿岸に根づかせることができれば、年間100万トン以上、二酸化炭素の吸収量を増やすことができるという。しかし、アマモを増やすことは容易ではない。稲穂のようなアマモの種。通常は2割程度しか発芽しない。この地域では、激減したアマモを復活させようと、30年以上、漁業者や小中高生などが協力して種をまいたり苗を植えたりしてきた。いまや、当初の20倍にまで面積を増やしている。入澤さん「ここは5年前に

高校が、再生活動を始めから根づいたアマモです。本当に私たちが初めて初めて成り立ったアマモ場です。とにかく感動です。ずっと危機的な状況で、何をやってもムダだという意見もあるんですけど、だからといって何もやらないのはおかしいし、未来を担っていく私たちが積極的に行動を起こしていく必要があると思います」

番組の最後には、この星の7割を占める広大な海には、地球の未来を救える大きな力が秘められている。いまなら、まだ間に合うかもしれない。できることは、きつとある。とありました。

#### 編集後記

今まで、人しか視界に入らなかつた私達は、植物をパートナーとして、考えていく時期に入っています。

そして、若い世代がこんなに頑張ってくれているのは、心に響きました。